

日田地区遺跡群発掘調査報告6
日田市埋蔵文化財調査報告書第57集

吹上Ⅲ

—7・8次調査の記録—

2005年

日田市教育委員会

日田市埋蔵文化財センター



吹上原地空中写真（北から）手前は小迫辻原遺跡



7次調査区空中写真（真上から）

序 文

本市に所在の吹上遺跡は、県内でも古くから弥生時代の大規模な弥生時代集落遺跡として知られ、今でも遺跡のあります畑では土器や石器を拾うことができます。

吹上遺跡ではこれまでに当委員会が11回の発掘調査を行ってきました。その結果、当時の住居や墓などが発見されて、そこからは多くの遺物が出土しています。

とくに平成7年に行いました6次調査では、青銅や鉄の武器、貝や石の装身具といった副葬品が納められていた甕棺墓や木棺墓が発見され、一躍注目されることになりました。

この6次調査場所は、関係者のご理解やご協力によって保存されることになり、現在は大分県の史跡の指定を受け、その後日田市が用地を公有化し、私どもで管理を行っています。

6次調査を契機に、翌平成8年からは別府大学の協力をいただきながら、遺跡の内容確認のための調査を実施し大きな成果を上げています。

本書はこうした発掘調査の内容を整理した7・8次調査成果を報告するもので、本書が今後の文化財保護や地域の歴史、学術研究などに幅広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書作成にいたるまで、多大なるご指導を賜りました関係機関の方々と、調査へのご協力をいただきました土地所有者の皆様方に対し、心から厚くお礼を申し上げます。

平成17年1月

日田市教育委員会

教育長 諫 山 康 雄

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が国庫・県費の補助を受けて実施した吹上遺跡の発掘調査報告書である。
2. 吹上遺跡の調査報告については分冊発行とし、本書では7・8次調査分を「吹上Ⅲ」として刊行する。
3. 7・8次調査の組織は、「吹上Ⅰ」第1章第3節 調査組織に記している。
4. 現場での実測者や写真撮影等の担当者については、各年次調査ごとに記している。
5. 本書の巻頭カラーに用いた航空写真は、平成5・8年度に撮影委託した成果品を使用した。
6. 出土遺物および図面、写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
7. 本書の執筆は、第9章を土居、第10章を行時が担当した。
8. 本書の編集と構成は、土居・行時で協議し、土居が行なった。
9. 題字は、日田市文化財調査委員である武石邦男氏の揮毫による。



日田市の位置

目 次

第9章 7次調査の記録	1
第1節 調査の概要	3
第2節 調査の内容	6
第3節 小結	16
第10章 8次調査の記録	29
第1節 調査の概要	31
第2節 調査の内容	33
第3節 小結	36

挿 図 目 次

(第9章 7次調査の記録)	
第1図 7次調査の位置 (1/2500)	2
第2図 7次調査区の位置図 (1/1000)	4
第3図 7次調査区の配置図 (1/200)	5
第4図 1・3トレンチ遺構配置図 (1/60)	7
第5図 1・3トレンチ出土土器実測図 (1/4)	7
第6図 2トレンチ遺構配置図 (1/60)	9
第7図 2トレンチ出土土器実測図 (1/4)	9
第8図 4トレンチ遺構配置図 (1/60)	11
第9図 4トレンチ出土土器実測図 (1/4)	13

第10図	2・4トレンチ出土石器実測図 (1/2・1/3)	13
第11図	1・3・7・8グリット遺構配置図 (1/60) と出土土器 (1/4)	14

(第10章 8次調査の記録)

第1図	8次調査の位置 (1/2500)	30
第2図	8次調査区の位置図 (1/1000)	32
第3図	1トレンチ遺構配置図 (1/80)	33
第4図	8次調査区出土遺物実測図 (1/4・1/2)	35

写真図版目次

巻頭図版1 吹上原地空中写真、7次調査区空中写真

(第9章 7次調査の記録)

図版1	1・3トレンチ	19
図版2	1・3トレンチ	20
図版3	2トレンチ	21
図版4	2トレンチ	22
図版5	4トレンチ	23
図版6	4トレンチ	24
図版7	4トレンチ	25
図版8	1～8グリット	26
図版9	1～8グリット	27
図版10	出土遺物	28

(第10章 8次調査の記録)

図版1	1トレンチ	39
図版2	1トレンチ	40
図版3	出土遺物	41

挿入写真目次

(第9章 7次調査の記録)	
写真1 吹上原台地空中写真	1
写真2 調査区近景写真	10
(第10章 8次調査の記録)	
写真1 吹上原台地空中写真	29

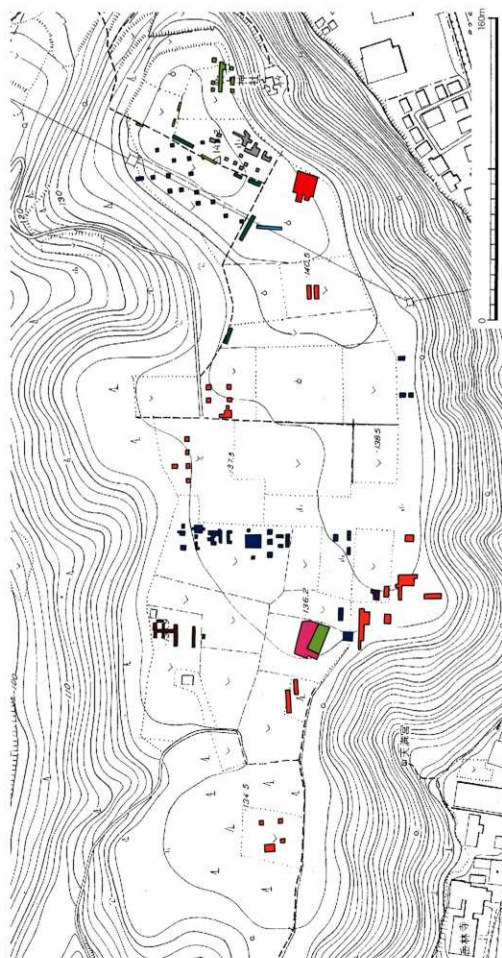
表 目 次

(第9章 7次調査の記録)	
第1表 7次調査出土土器観察表	17
第2表 7次調査出土石器観察表	17
(第10章 8次調査の記録)	
第1表 8次調査出土土器観察表	37
第2表 8次調査出土石器観察表	37

第9章 7次調査の記録



吹上原台地空中写真（白印は調査位置）



第1図 吹上遺跡調査の位置 (1/2500)

- 12K
- 11K
- 10K
- 9K
- 8K
- 7K
- 6K
- 5K
- 4K
- 3K
- 2K
- 1K

第1節 調査の概要 (第1・2図)

今回の7次調査は6次調査において発見された青銅器・鉄器、貝輪などを副葬する甕棺・木棺墓群の広がりを確認する目的で実施した確認調査の1年目にあたる。調査地点の選定にあたっては当初の計画段階では6次調査地点のすぐ北側の杉林を対象候補地としていたが、木と木の間が狭いことから甕棺墓を発見した場合に調査区の拡張が難しいとの判断で断念し、その北のクスギ林を対象に調査を行うことにした。

調査は地権者の同意を得て、平成9年3月4日より開始した。調査区の設定にあたっては予定地に植わっているクスギを避けるために西側はトレンチとし、遺構の検出に応じて拡張を行い、東側はグリットを基本に進めた。今回の調査では墳墓群の確認が目的であったので、墳墓以外の住居跡等の生活遺構についてはその検出のみにとどめることにした。調査では遺構面までの深さが浅いと想定して手掘りで表土を除去し、遺構検出作業、遺構実測、写真撮影等の各作業を行い、3月28日には全ての調査区の埋め戻しを行って作業を終了した。

7次調査での各トレンチで検出した遺構については、掘下げを行っていないためはつきりしない部分もあるが、堅穴住居跡1軒、貯蔵穴4基、土坑4基、ビット21である。こうした調査内容の一部についてはすでに速報としてまとめているが、調査後数年が経過していることから本報告をもって正式な報告とする。

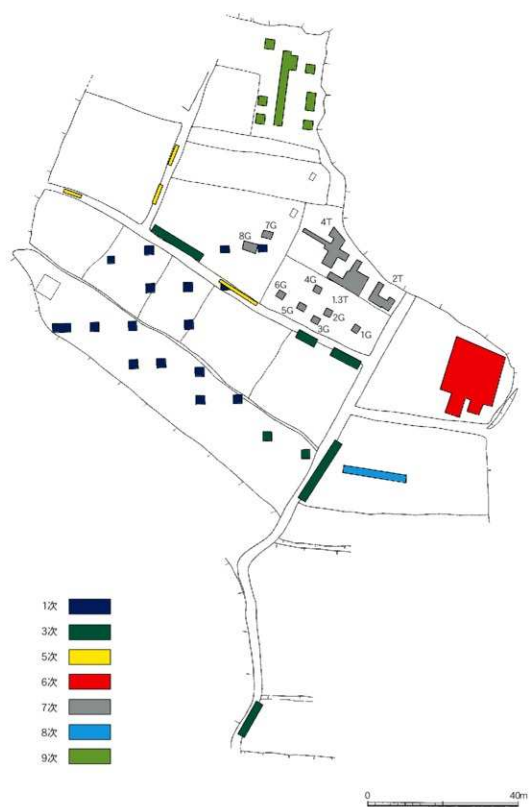
7次調査の各調査区の面積は1・3トレンチが40㎡、2トレンチが20㎡、4トレンチが45㎡、1～6グリットが各4㎡、7グリットが6㎡、8グリットが10㎡で、総面積は145㎡である。

7次調査の報告に関する平成16年度の組織体制は、以下のとおりである。

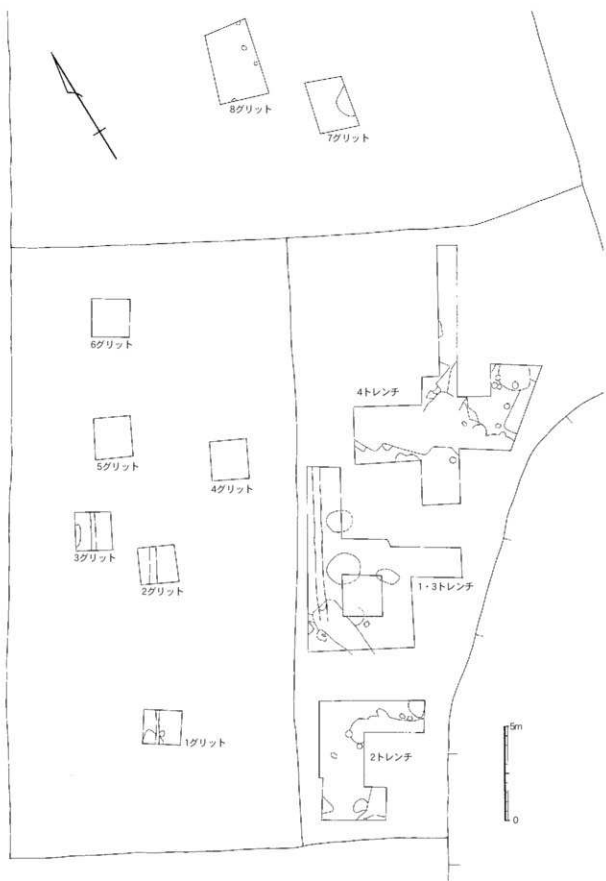
調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	諫山 康雄 (日田市教育委員会教育長)
調査統括	後藤 清 (同文化課長)
調査事務	高倉 隆人 (同文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長)
	伊藤 京子 (同文化課副主幹)
	中村 邦宏 (同文化課主事補)
報告書担当	土居 和幸 (同文化課主査)
整理作業員	鍛冶谷節子、坂口 豊子
協力者	行時 志郎 (現、日田市経済部農政課主任)
	行時 桂子 (日田市教育委員会文化課主任)
	若杉 竜太 (同文化課主任)
	渡邊 隆行 (同文化課主事)

なお、報告書に掲載した挿図・図版に携わった関係者は、次のとおりである。

遺物実測	土居 和幸
製 図	土居 和幸、藤野 美音 (同文化課調査補助員)
遺物写真	長谷川正美 (有限会社雅企画)



第2図 7次調査区の位置図 (1/1000)



第3図 7次調査区の配置図 (1/200)

第2節 調査の内容

(1) 1・3トレンチの調査(第4・5図、図版1・2・10)

このトレンチはそもそも2つ設定した調査区を拡張して1つのトレンチとした。トレンチ東側は崖面に近く、そのためトレンチ東側から西側に向うに連れ深くなっている。地山は黄褐色土を呈す。検出した遺構には土坑7基、溝1条、ピット6である。

1号土坑(第4図)

この土坑は調査区の北側で検出した。規模は径が約1.3mで、平面は円形をなすと考えられる。その形状から袋状貯蔵穴の可能性が高い。遺物は検出上面から弥生土器片が出土しているが、図示できるものはない。

2号土坑(第4図)

この土坑は1号土坑の南側で検出した。規模は径約1.7mの円形をなしており、1号土坑と同様に袋状貯蔵穴の可能性が高い。遺物は検出上面から弥生土器片が出土しているが、図示できるものはない。

3号土坑(第4図)

この土坑は2号土坑の南側で検出した。規模は短軸が1～1.7m、長軸が3mを越える不整形を呈す。土坑の北側隅(破線の範囲)には炭や焼土がまとまってみられた。遺物は検出上面から図示した遺物などが出土している。

出土遺物(第5図1～4、図版10)

1は甕である。口縁部は内湾する逆L字状をなし、口縁部下に一条の三角突帯を巡らせる。外面はハケ調整。復元口径は43.0cmを測る。2は甕の底部である。厚みをもつ平底をなす。復元底径は7.6cmを測る。3は壺である。肩部に小さなM字の突帯を巡られる。外面はミガキ。4も壺である。口縁部は撇先状をなし、厚みがあり、内面には突出しない。復元口径は32.4cmを測る。

4号土坑(第4図)

この土坑は2号土坑の東側で検出した。規模は長軸が約1.2m、短軸が約0.7mで、平面は不整形を呈す。遺物は検出上面から弥生土器片や磨製石斧の欠損品などが出土した。埋土の様子から弥生時代の所産であろう。

5号土坑(第4図)

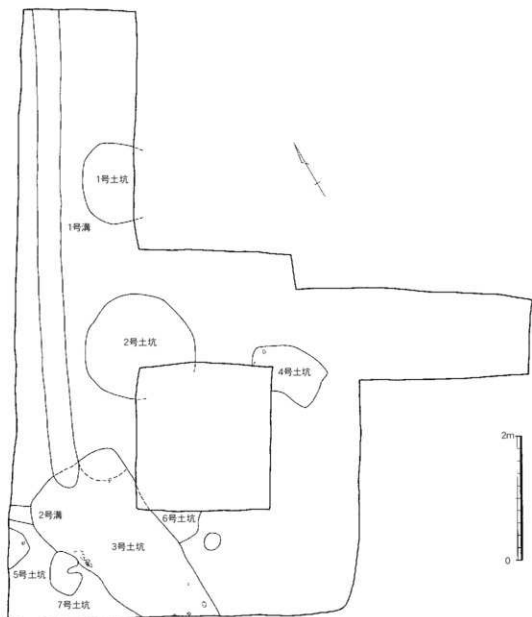
この土坑は3号土坑西側の調査区北東隅で検出した。規模等は不明。弥生土器片が出土した。

6号土坑(第4図)

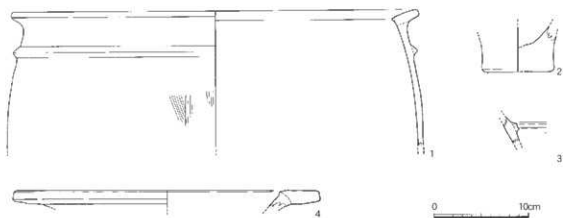
この土坑は3号土坑と重複しており、3号土坑に切られている。規模等は不明。

7号土坑(第4図)

この土坑は不整形な形状で、3号土坑を切る。規模等は不明。



第4図 1・3トレンチ遺構配置図 (1/60)



第5図 1・3トレンチ出土土器実測図 (1/4)

(2) 2 トレンチの調査 (第6・7・10 図、図版3・4・10)

このトレンチは1・3 トレンチの南に設定した。このトレンチもすぐ東側は崖面で、トレンチ西側は地山面まで20cm程度と浅いが東側に向うに連れ深くなり約60cmを測る。地山は黄褐色土を呈し、表土から地山までは一層で、土器片や石器などの遺物が混入していた。検出した遺物のうち、はっきりしているものは竪穴1基、土坑4基、溝1条、ピット6であるが、溝1(1号溝)は近世以降の所産である。

1号竪穴 (第6図)

この竪穴は調査区南側隅で検出した。一部溝と重複しており、その新旧関係ははっきりしない。方形あるいは長方形のプランになりそうなので竪穴と考えた。遺物は弥生土器片が出土している。

1号土坑 (第6図)

この土坑は調査区北側で検出した。規模は短軸が1m以上、長軸が4mを越えるものと推定され、平面は細長い溝状をなすと思われる。遺物は検出上面から図示した遺物などが出土している。

出土遺物 (第7図3・4、図版10)

第7図3は甕である。器壁は全体的に薄く仕上げられており、口縁部は如意形をなし、大きく外湾する。口縁部下には一条の三角突帯を巡らせる。復元口径は33.2cmを測る。4は壺の口縁部であろう。口縁部は鎌先状をなし、厚みがあり、内面にわずかに突出する。復元口径は26.3cmを測る。

2号土坑 (第6図)

この土坑は調査区の東隅でその一部を検出した。規模等は不明である。

出土遺物 (第10図3、図版10)

3は石椁丁で、2孔を穿つ。現存長9.1cm、現存幅5.7cm、現存厚0.8cmを測る。輝緑凝灰岩製。

3号土坑 (第6図)

この土坑は1号竪穴と重複するように検出した。規模は長軸が約0.7m、短軸が約0.6mで、平面は不整形を呈す。遺物は検出上面から弥生土器片や磨製石斧の欠損品などが出土した。

出土遺物 (第7図2・5、第10図1、図版4・10)

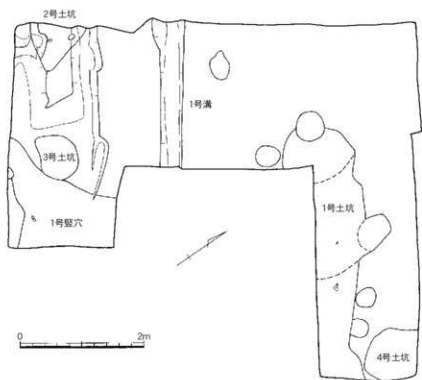
第7図2・5は甕である。2は口縁部は如意形をなし、口唇部に刻目を施す。口縁部下には一条の三角突帯を巡らせる。外面はハケ調整。5は上げ底の底部で、厚みをもつ平底をなす。復元底径は7.7cmを測る。第10図1は打製石斧である。基部を欠損する。安山岩製。

4号土坑 (第6図)

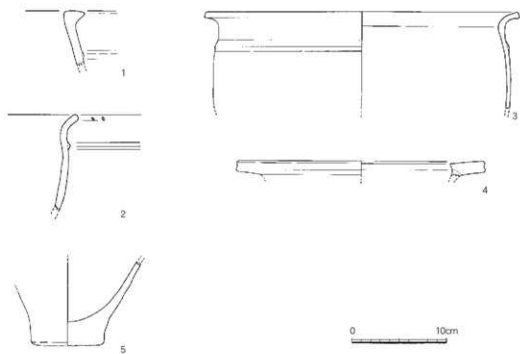
この土坑は調査区東隅で検出した。規模は長軸が0.9m以上、短軸が0.8m以上で、平面は不整形を呈すと思われる。遺物は出土していないが、弥生時代の所産であろう。

トレンチ出土遺物 (第7図1、図版10)

1は甕である。口縁部は内傾し、上面は平坦となる。端部は三角形に仕上げられ、口縁部下には一条の三角突帯を巡らせている。



第6図 2トレンチ遺構配置図 (1/60)



第7図 2トレンチ出土土器実測図 (1/4)

(3) 4トレンチの調査 (第8・10図、図版5～7・10)

トレンチは1・3トレンチの北側に設定し、遺構の確認の追跡を目的に調査区の拡張を行った。このトレンチも東側は崖面に近く、そのためトレンチの西側は地山面まで約25cmと浅いが東側に向うに連れ深くなり約50cmを測る。地山は黄褐色土を呈し、表土から地山までは一層で、土器片や石器などの遺物が混入していた。弥生土器のほかにも染付などの遺物も出土している。4トレンチで検出した遺構は確実なもので竪穴1基、土坑6基、ピット8で、このほかにも竪穴住居や竪穴、土坑といった遺構が存在するが、その数ははっきりしない。

竪穴住居・竪穴・土坑群 (第8・9図、図版5～7・10)

調査区中央部を中心にまとまってみられた遺構群で、調査中の検出作業においてはある程度の切り合い関係から遺構ラインを想定することができたものの、完掘もしていないし、不確定な要素も多いのでここでは存在すると予想される竪穴住居・竪穴・土坑群として報告しておく。調査時の所見からすれば、このまとまった遺構群の北東側には竪穴住居が1ないし2軒あるようで、さらにこの竪穴住居と竪穴ないし土坑が重なり合っている。中央には竪穴1基が存在し、2号土坑を切っていることは確認できている。その南側には土坑が数基存在し合い、重複関係にある。こうした遺構からは検出段階においてまとまった遺物が出土しており、その取上げにあたっては群全体の通し番号を用いた。このトレンチでの遺構検出面は暗茶褐色土で、東側は明黄褐色土となっている。以下、主な出土遺物を掲載する。

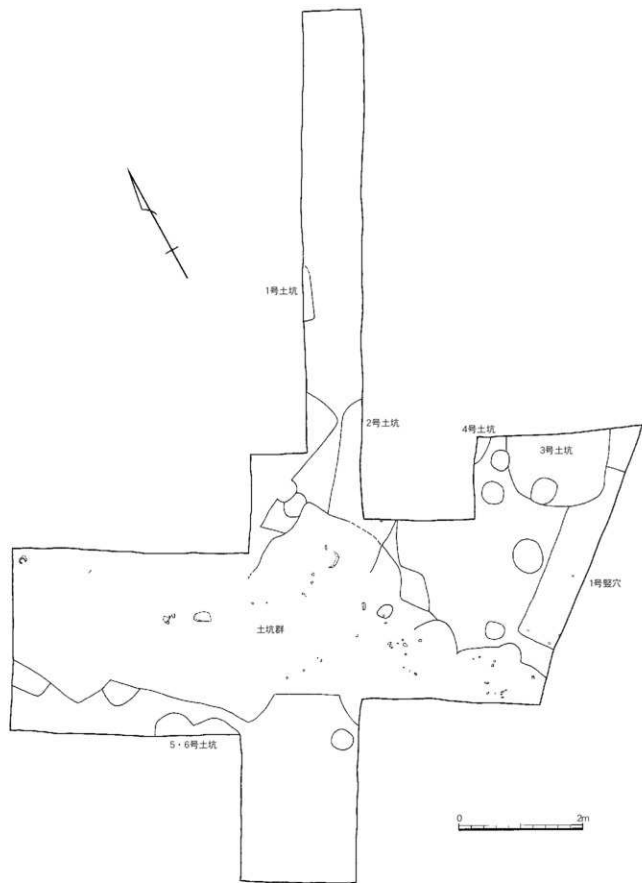
第9図の1～4は甕である。1は小型の甕で、口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸く仕上げる。外面はハケ後にナデ調整が施されている。復元口径は14.4cmを測る。2は1に比べ厚みがあり、大きい。口縁部は「く」字状に外反する。この甕の色調・胎土は1の甕と同じである。復元口径は17.2cmを測る。3は底部である。底は薄く仕上げられている。復元底径は6.6cmを測る。4も底部で、円盤貼り付けの底は厚みをもつ。復元底径は7.4cmを測る。6～13は壺である。6は口縁部が「く」字形に大きく外反する。復元口径は14.8cmを測る。7は口縁部は6の壺と同様に「く」字形に外反する。外面は縦ハケ後にナデ調整が施されている。口径は20.2cmを測る。8は口縁部は「く」字形に大きく外反し、口縁端部は上方につまみ上げ、下方へと垂れる。外面は縦ハケ後にナデ調整が施されている。復元口径は23.2cmを測る。7と8の壺は胎土・色調が同じであり、1・2の甕とも類似している。9～11はいずれも頸部と肩部の位置に一条の三角突帯を巡らせる。9・11の三角突帯は上方を向く。12は頸部と肩部の位置に一条のM字突帯を巡らせる。13は底部である。底はやや丸みをもつ。18・20は器台である。18は小型で、器壁が薄い。復元底径は4.2cmを測る。20は大型の器台で、器壁が厚い。復元底径は18.4cmを測る。磨耗が著しい。

1号竪穴 (第8図)

この竪穴は調査区の西側で検出した。その規模は長軸が3.02m、短軸が1.15m+αを測る。方形あるいは長方形プランと推定され、



写真2) 調査区近景写真



第8図 4トレンチ遺構配置図 (1/60)

竪穴住居の可能性が高い。遺物は検出上面から弥生土器片が出土している。

1号土坑（第8図）

この土坑は調査区の北側隅で検出した。規模等の詳細は不明である。遺構からは遺物が出土していないが、埋土の様子から弥生時代の所産であろう。

2号土坑（第8図）

この土坑は1号土坑の南側で検出した。規模は短軸が約1m前後、長軸2m以上を測り、平面は溝状をなすと思われる。遺物は検出上面でから弥生土器片が出土しており、埋土の様子から弥生時代の所産であろう。

3号土坑（第8図）

この土坑は調査区の東側で検出した。規模は短軸が1.65m、長軸が1.1m + α を測る。平面が方形あるいは長方形に近いプランが考えられる。1号竪穴を切る。埋土の様子から墳墓ではなさそうである。遺物は検出上面から弥生土器片が出土しており、埋土の様子から弥生時代の所産であろう。

4号土坑（第8図）

この土坑は3号土坑の北側でその一部を検出した。規模等は不明である。遺物は出土していないが、埋土の様子からすれば弥生時代の遺構であろう。

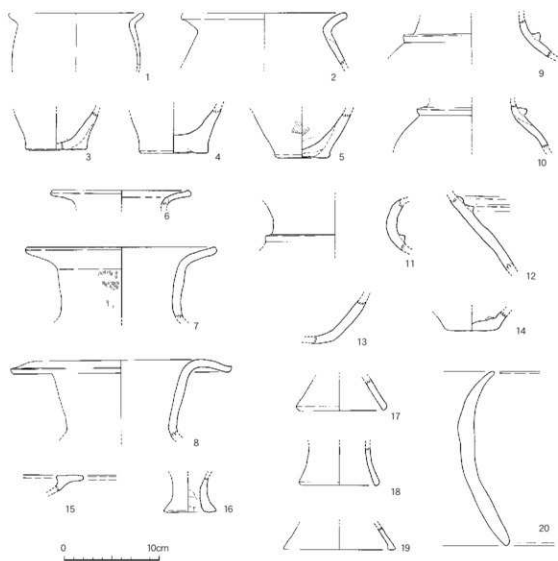
5・6号土坑（第8図）

この土坑は調査区東隅でその一部を検出した。2つの小土坑が切りあって存在しているものと考えられるが、新旧関係は確認できなかった。両土坑とも埋土の様子から弥生時代の所産と考えられるが、遺物は出土していない。

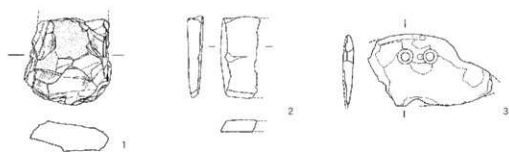
4 トレンチ出土の遺物（第9・10図、図版10）

第9図5は甕の底部である。やや上げ底気味の底の厚みはなく、薄く仕上げられている。内外面ともハケ後にナデ調整。復元底径は6.0cmを測る。14は壺の底部である。底は平底をなす。復元底径は9.6cmを測る。15は高坏であろう。口縁部は鋸先状をなし、上面は平坦で、内面に突出する。16はミニチュア土器である。復元底径5.6cmを測る。17・19は器台である。いずれも器壁は薄い。

第10図2は柱状片刃石斧である。欠損品である。最大長4.3cm、最大幅1.9cm、最大厚0.8cmを測る。頁岩製。



第9図 4トレンチ出土土器実測図 (1/4)



第10図 2・4トレンチ出土土器実測図 (1/2・1/3)

(4) 1グリットの調査 (第3・11図、図版8・9)

2トレンチ東側約7mの地点に、2m×2mのグリットを設定した。このグリットでの遺構は第11図に示すとおり、溝1条、土坑1基、ピット1、不明1を確認した。溝はその幅が40cm前後で、埋土の様子から近世以降の所産であろう。土坑は一辺が1mを測り、平面は方形もしくは長方形なすと考えられ、埋土の様子から弥生時代の遺構には間違いなさそうであるが、墳墓ではない。各遺構からは遺物は出土していない。グリット内からは弥生土器片のほかに中世期の銅鉢などが出土している。グリットでの遺構面の地山は暗茶褐色土である。

出土遺物 (第11図1・2)

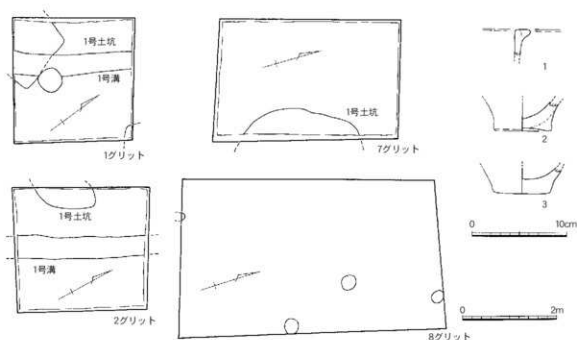
1・2は甕である。1は口縁部が逆L字状をなし、口縁は三角突帯状をなしている。2は底部で、上げ底をなす。復元口径は3.1cmを測る。いずれもグリット一括品。

(5) 2グリットの調査 (第3・11図、図版8・9)

1グリットの北側約8mの地点に、2m×2mのグリットを設定した。このグリットでの遺構は、溝1条を確認した。溝はその幅が50cm前後を測り、埋土の様子からみて近世以降の所産と考えられる。検出した位置から1グリットの溝の延長線上にあたるものと判断される。この溝からは遺物は出土していない。グリット内からは弥生土器片などが小量出土している。グリットでの遺構面の地山は暗茶褐色土である。

(6) 3グリットの調査 (第3図、図版8・9)

2グリットのすぐ東側の地点に、2m×2mのグリットを設定した。このグリットでの遺構は、溝1条と土坑1基を確認した。溝はその幅が35cm前後を測り、埋土の様子からすると近世遺構



第11図 1・3・7・8グリット遺構配置図 (1/60) と出土土器 (1/4)

の所産と考えられる。1・2グリット検出の溝と並行して走っていることから、同時期のものであろう。土坑は一部しか確認できていないが長軸は約80cmで、平面が不整形をなすと思われる。埋土の様子からして弥生時代の遺構には間違いなさそうであるが、墳墓とは考え難い。これら各遺構から遺物は出土していない。グリット内からは弥生土器小片が少量出土している。グリットでの遺構面の地山は暗茶褐色土である。

出土遺物 (第11図3、図版10)

3は小型の甕の底部である。底は厚みがあり、上げ底をなしている。復元底径は6.0cmを測る。グリット一括品。

(7) 4グリットの調査 (第3図、図版8・9)

2グリットの北側約5mの地点に、2m×2mのグリットを設定した。このグリットでは遺構は検出されず、またグリット内からは遺物は出土していない。グリットの地山は暗茶褐色土である。

(8) 5グリットの調査 (第3図、図版8・9)

4グリットの東側約5mの地点に、2m×2mのグリットを設定した。このグリットでは遺構は検出されず、またグリット内からは弥生土器小片が数点出土した程度である。グリットの地山は暗茶褐色土である。

(9) 6グリットの調査 (第3図、図版8・9)

5グリットの北側約5mの地点に、2m×2mのグリットを設定した。このグリットでは遺構は検出されず、またグリット内からは弥生土器小片が数点出土したのみである。グリットの地山は暗茶褐色土である。

(10) 7グリットの調査 (第3・11図、図版8・9)

4トレンチ北側の地点に、2m×3mのグリットを設定した。このグリットでの遺構は第11図に示すとおり、土坑1基を確認した。検出した範囲内の規模や形態から貯蔵穴とも考えられる。遺構からは遺物は出土していない。グリット内から弥生土器小片や染付けなどが出土している。このグリットでの遺構面の地山は暗茶褐色土である。

(11) 8グリットの調査 (第3・11図、図版8・9)

7グリットすぐ東側の地点に、2.5m×4mのグリットを設定した。このグリットでの遺構は第11図に示すとおり、ピット4を確認した。埋土の様子から弥生時代の遺構と考えられる。各遺構からは遺物は出土していない。グリット内から弥生土器小片が出土している。このグリットでの遺構面の地山は暗茶褐色土である。

第3節 小結

7次調査区は台地東側の盆地内を見渡すには絶好の位置にあり、周辺はすぐ東には9次B調査地点、西には1・3次調査地点、南には6・8次調査地点と遺跡内でも多くの調査区が設定されている場所でもある。これまでに報告したように、7次調査での各トレンチやグリットで確認した遺構は、調査区によってその密度にばらつきがみられ、全体的に密度は低く、台地中央部から西側一帯の状況と比較すると希薄な印象をうける。ここでは発見された各遺構の時期や遺物についてまとめておくことにする。

まず、円形のプランとなるであろう1・3トレンチの1・2号土坑や7グリットの1号土坑は、その平面形からして袋状貯蔵穴と理解して間違いないであろう。これらの年代については完掘していないため把握が難しいが、周辺での調査事例では板付Ⅱ式や所謂亀ノ甲タイプの甕、さらには城ノ越式の甕などが発見されていることから、同一時期の前期末から中期初頭と捉えられそうである。7次調査区のあるこの一帯では各調査区において必ずといってよいほど袋状貯蔵穴が発掘されており、ここ台地東部の中央部から縁辺部にかけての広い範囲には当該期の袋状貯蔵穴が多く分布する傾向にあるものと予想される。

また、出土した遺物だけみると2トレンチ3号土坑も先の袋状貯蔵穴と同じ時期に比定されそうである。溝状をなす1・3トレンチの3号土坑は、須玖Ⅰ式とされる遺物から中期前半頃に位置付けられるであろう。

このほか、4トレンチの堅穴住居・堅穴・土坑群については、重複する遺構の内容や先後関係を的確に確認することは出来なかったが、堅穴住居や堅穴さらには土坑といった遺構である可能性は高い。こうした遺構群からは胎土・色調から見て搬入品と考えられる須玖Ⅱ式の広口壺（7～10）や、蹴先口縁の壺（15）などの遺物に加え、「く」字状の甕（1・2）なども認められるなど、少なくとも中期後半頃と中期末以降の時期の遺構が存在しそうである。

このように、遺構の上面で発見された流れ込みの遺物とはいえ、全体的には中期の土器が目だっていることから、7次調査での遺構は中期を中心とする時期の遺構が分布していると推測できそうである。

なお、1・3トレンチや2トレンチで検出した1号溝については、1・2グリットの1号溝と同じ近世以降のものである。

以上、今回の調査で確認できた遺構は、その大半が堅穴や土坑といった生活遺構である。調査の目的であった6次調査地点での甕棺墓や木棺墓といった墳墓群の広がりはもちろんのこと、それらに関連する遺構の確認にまでにはいたらなかった。

第1表 7次調査出土土器観察表

調査番号	区名	遺構名	種類	形状	法 量				調 整		胎 土	焼成	色 調		備 考
					口径	胴径	底径	器高	片高	片内径			外周	内周	
第5区-1	1-3T	3号土坑	弥生 甕	143.0	-	-	114.4	ハナ 瓦ナナ	?	ABCDH	具	黒茶褐色	明褐色	三内定部	
第5区-2	1-3T	3号土坑	弥生 甕	-	-	17.6	14.9	不明	不明	ABCDEH	具	黒茶色	灰褐色		
第5区-3	1-3T	3号土坑	弥生 甕	-	-	-	12.9	七草寺	不明	ABH	具	灰褐色	明褐色		
第5区-4	1-3T	3号土坑	弥生 甕	132.4	-	-	11.9	ナナ	ナナ	ABCG	具	明茶色	灰褐色		
第7区-1	2T	一基	弥生 甕	-	-	-	15.8	ナナ	ナナ	ABCEH	具	明褐色	明褐色		
第7区-2	2T	3号土坑	弥生 甕	-	-	-	110.3	ハナ瓦 ナナ	ナナ	ABCH	具	黒褐色	明褐色	口径経目 三内定部迄	
第7区-3	2T	1号土坑	弥生 甕	133.2	-	-	110.3	ハナ瓦 ナナ	ナナ	ABCH	具	明茶褐色	暗灰褐色		
第7区-4	2T	1号土坑	弥生 甕	126.3	-	-	11.7	ナナ	ナナ	ABGH	具	黒茶褐色	灰褐色		
第7区-5	2T	3号土坑	弥生 甕	-	-	17.7	18.8	不明	不明	ABCDEH	具	明茶褐色	明茶褐色		
第9区-1	4T	2号土坑	弥生 甕	114.4	-	-	15.9	不明	不明	ABH	具	明茶褐色	明茶褐色		
第9区-2	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	117.2	-	-	15.6	ナナ	不明	ABH	具	明茶褐色	明茶褐色		
第9区-3	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	-	-	16.6	13.7	不明	不明	ABCDEH	具	明茶褐色	暗褐色		
第9区-4	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	-	-	7.4	14.8	ハナ瓦 ナナ	ナナ	ABCDH	具	明茶褐色	黒褐色		
第9区-5	4T	一基	弥生 甕	-	-	16.6	14.7	ハナ瓦 ナナ	ハナ瓦 ナナ	ABEH	具	明褐色	灰褐色		
第9区-6	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	114.8	-	-	11.5	不明	不明	ABDEH	具	黄褐色	黄褐色		
第9区-7	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	20.2	-	-	17.4	ハナ瓦 ナナ	ナナ	ABH	具	白褐色	白褐色		
第9区-8	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	23.2	-	-	18.3	ハナ瓦 ナナ	ナナ	ABH	具	白褐色	白褐色		
第9区-9	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	-	-	-	14.2	ナナ	不明	ABDH	具	茶褐色	茶褐色	三内定部	
第9区-10	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	-	-	-	14.6	ナナ	?	ABDEH	具	明茶褐色	明茶褐色	三内定部	
第9区-11	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	-	-	-	15.5	ナナ	ナナ	ABCDEH	具	明茶褐色	明茶褐色	三内定部	
第9区-12	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	-	-	-	17.2	不明	不明	BH	具	灰褐色	灰褐色		
第9区-13	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	-	-	-	14.6	不明	不明	BDEH	具	黄褐色	黒褐色		
第9区-14	4T	一基	弥生 甕	-	-	19.6	12.1	ナナ?	ナナ	BDEH	具	明茶褐色	明茶褐色		
第9区-15	4T	一基	弥生 高坪	-	-	-	11.8	不明	不明	ABCDE	具	明茶褐色	明茶褐色		
第9区-16	4T	一基	弥生 七子ナナ 土甕	-	-	15.6	13.7	無押丸	無押丸	ABCDEH	具	明茶褐色	灰褐色		
第9区-17	4T	一基	弥生 甕	-	-	19.6	13.3	ナナ?	ナナ?	ABCDEH	具	暗茶褐色	暗茶褐色		
第9区-18	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	-	-	18.4	14.2	不明	不明	ABDH	具	明褐色	明褐色		
第9区-19	4T	一基	弥生 甕	-	-	11.8	12.0	不明	不明	ABCDEH	具	明褐色	明褐色		
第9区-20	4T	祭祀区1 土坑部	弥生 甕	-	-	-	118.4	不明	不明	ABCDH	具	茶褐色	茶褐色		
第11区-1	1G	一基	弥生 甕	-	-	-	12.9	不明	不明	BGH	具	黄褐色	黄褐色		
第11区-2	1G	一基	弥生 甕	-	-	13.1	13.1	不明	不明	ABEH	具	明褐色	明褐色		
第11区-3	3G	一基	弥生 甕	-	-	18.9	12.8	ハナ	ハナ	ABH	具	赤褐色	暗褐色		

法量の単位はcm。() 書きは、残存と復原寸を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第2表 7次調査出土石器観察表

調査番号	区名	遺構名	形状	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第10区-1	2T	3号土坑	打製石斧	安山岩	19.1	15.7	12.3	1134.1	
第10区-2	4T	一基	打製片刃石斧	閃岩	4.2	1.9	0.8	110.1	
第10区-3	2T	2号土坑	石槌	輝緑岩	19.1	15.7	10.8	150.5	

法量の単位はcm。() 書きは、残存と復原寸を表す。



1・3トレンチ (北西から)



1・3トレンチ (北から)



1・3トレンチ (南西から)



1・3トレンチ3号土坑 (南から)



2トレンチ (南から)



2トレンチ (西から)



2トレンチ (西から)



2トレンチ 2号土坑 (南から)



4トレンチ (北から)



4トレンチ (東から)



4トレンチ (南から)



4トレンチ (東から)



4 トレンチ竪穴住居・竪穴群 (南西から)



4 トレンチ竪穴住居・竪穴群 (北から)



1～6グリット (北から)



7・8グリット (南から)



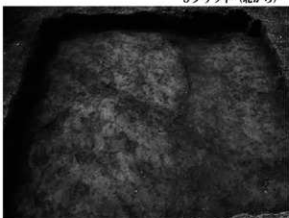
1 グリット (北から)



5 グリット (北から)



2 グリット (北から)



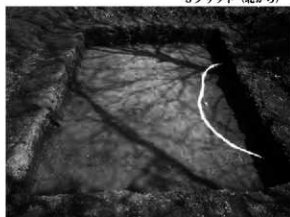
6 グリット (南から)



3 グリット (北から)



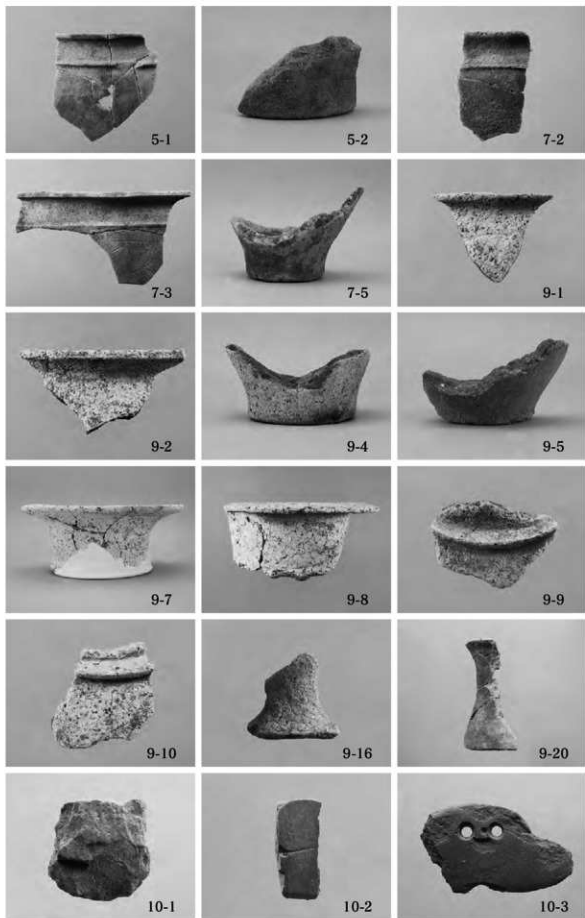
7 グリット (南から)



4 グリット (南から)



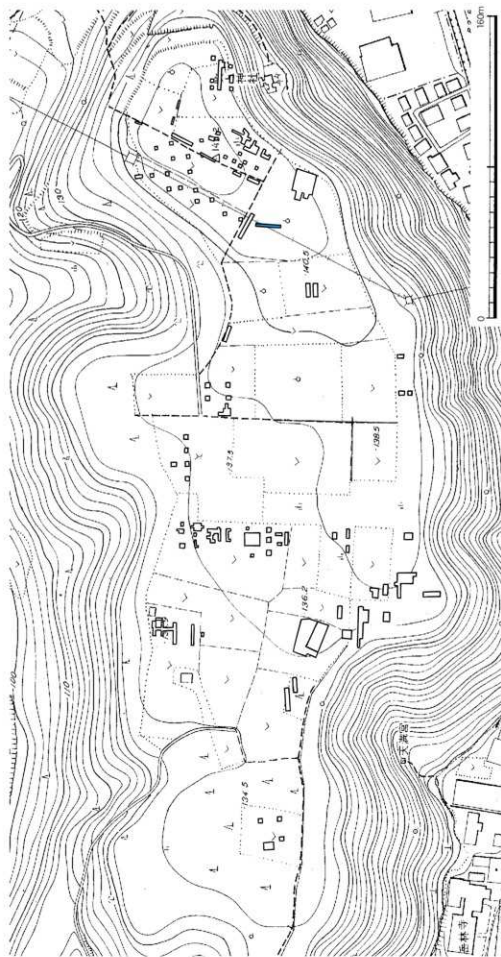
8 グリット (南から)



第10章 8次調査の記録



吹上原台地空中写真（白印は調査位置）



第1図 8次調査の位置 (1/2500)

8次

第1節 調査の概要 (第1・2図)

今回の8次調査は6次調査において発見された青銅器・鉄器、貝輪などを刷葬する甕棺・木棺墓群の広がりを確認する目的で実施した確認調査の2年目にあたる。調査地点の選定にあたっては昨年度実施の7次調査地点が6次調査地点北側を対象として実施した結果、6次調査地点において発見された墳墓群の確認がされなかったことから、6次調査区の西側における広がりの有無を確認するために行うことにした。

トレンチの設定にあたっては、土地の中に作物や樹木が植えられていたことから、地権者と協議を行い、それらに支障のない高圧電線内の区域に限って調査を行うことで地権者の同意を得ることができ、平成10年3月13日より調査を開始した。

今回の調査では墳墓群の確認が目的であったので、墳墓以外の住居跡等の生活遺構についてはその検出のみにとどめることにした。調査では遺構面までの深さが浅いと想定して手掘りで表土を除去し、遺構検出作業、遺構実測、写真撮影等の各作業を行い、3月18日には全ての調査区の埋め戻しを行って作業を終了した。

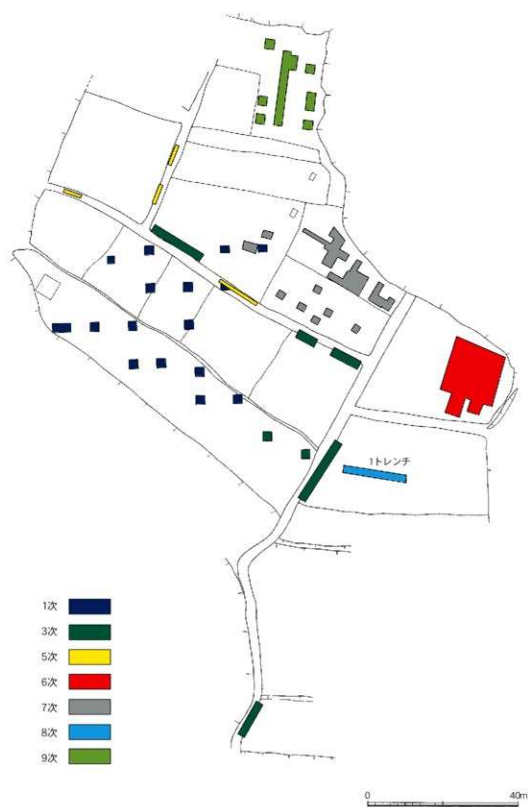
8次調査でのトレンチから検出された遺構については、掘下げを行っていないためはつきりしない部分もあるが、竪穴住居跡2軒、土坑4基、ピット3個が確認された。こうした調査内容の一部は速報としてまとめているが、調査後数年が経過しており本報告をもって正式な報告とする。本調査区の面積は28.7㎡である。

8次調査の報告に関する平成16年度の組織体制は、以下のとおりである。

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	諫山 康雄 (日田市教育委員会教育長)
調査統括	後藤 清 (同文化課長)
調査事務	高倉 隆人 (同文化課課長補佐兼埋蔵文化財係長)
	伊藤 京子 (同文化課副主幹)
	中村 邦宏 (同文化課主事補)
報告書担当	土居 和幸 (同文化課主査)
	行時 志郎 (現、日田市経済部農政課主任)
整理作業員	鍛冶谷節子、坂口 豊子
協力者	行時 桂子 (日田市教育委員会文化課主任)
	若杉 竜太 (同文化課主任)
	渡邊 隆行 (同文化課主事)

なお、報告書に掲載した挿図・図版に携わった関係者は、次のとおりである。

遺物実測	土居 和幸
製 図	藤野 美音 (同文化課調査補助員)
遺物写真	長谷川正美 (有限会社雅企画)



第2図 8次調査区の位置図 (1/1000)

第2節 調査の内容

1 トレンチの調査 (第2・3図、図版1～3)

このトレンチは高压電線に沿って2m×17mの調査区を設定して行なった。トレンチ設定区域内には、樹木が植えられていたため、それらを残す形で掘り下げ作業を開始し、約30cm程度掘下げた段階で地山面に到達した。地山は暗茶褐色の粘質土で6次調査地点とほぼ同様であった。この面で遺構の検出を行った結果、トレンチ内からは竪穴住居跡2軒や土坑4基、ピット4個、近世以降の清跡などが確認された。

1号竪穴住居 (第3図、図版2)

この竪穴住居はトレンチ南端で確認された。トレンチコーナー付近からほぼ直線的に約2m北東方向に延びて調査区外へと続いており、方形または長方形プランの住居跡ではないかと推測される。この住居跡に伴うと判断される遺物は確認されていない。

2号竪穴住居 (第3図、図版2)

この竪穴住居はトレンチ北側で確認された。住居跡のプランはほぼトレンチの方向と一致しており、一辺が約3.5mの方形または、長方形プランの住居跡ではないかと推測される。この住居からは遺構に伴うと見られる図示可能な遺物が出土しており説明を加える。

出土遺物 (第4図1～5、図版3)

1は甕の口縁部である。端部は亀ノ甲タイプの特徴を持ち、逆三角形に肥厚させている。2は甕底部である。底部のつくりは厚く、底面はやや上げ底状を呈している。外面刷毛調整を施している。3も甕底部である。2に比べて底部のつくりが薄く、底面もほぼ平坦に仕上げている。外面は刷毛の後にナデ調整、内面はナデ調整を施す。4は壺の口縁部である。内側には蓋受部が貼りつけられている。外面は暗文が施され、内面はナデまたは磨きを施す。5は甕である。口縁部部に向かってほぼ直口する。内外面とも丹が塗られており、祭祀用の土器であろうか。

1号土坑 (第3図、図版2)

この土坑はトレンチほぼ中央で確認された。土坑は確認面で直径約1mの円形プランを呈している。貯蔵穴であろうか。この土坑からは1点図示可能な遺物が出土している。

出土遺物 (第4図6、図版3)

6は甕口縁部である。如意形を呈している。



第3図 1 トレンチ遺構配置図
(1/80)

2号土坑 (第3図、図版2)

この土坑はトレンチほぼ中央付近で確認された。4号土坑に切られる。土坑は確認面で直径約1.2mの隅丸方形プランを呈すると推測される。1号同様貯蔵穴であろうか。この土坑からは図示可能な出土遺物はなかった。

3号土坑 (第3図)

この土坑はトレンチ中央よりやや北側で検出された。確認面で長軸約1.3m短軸約0.9mを測る不定形プランを呈する。この土坑からは1点図示可能な遺物が出土している。

出土遺物 (第4図7、図版3)

7は甕口縁部である。端部は短いながらも鋤先状を呈する。外面は端部を貼付する際の指頭圧痕が顕著に残る。

4号土坑 (第3図、図版2)

この土坑はトレンチほぼ中央付近で検出された。2号土坑を切る。土坑は確認面で直径約1.4mの隅丸方形プランを呈すると推測される。この土坑も1・2号土坑同様貯蔵穴であろうか。この土坑からは図示可能な遺物の出土はなかった。

ピット (第3図)

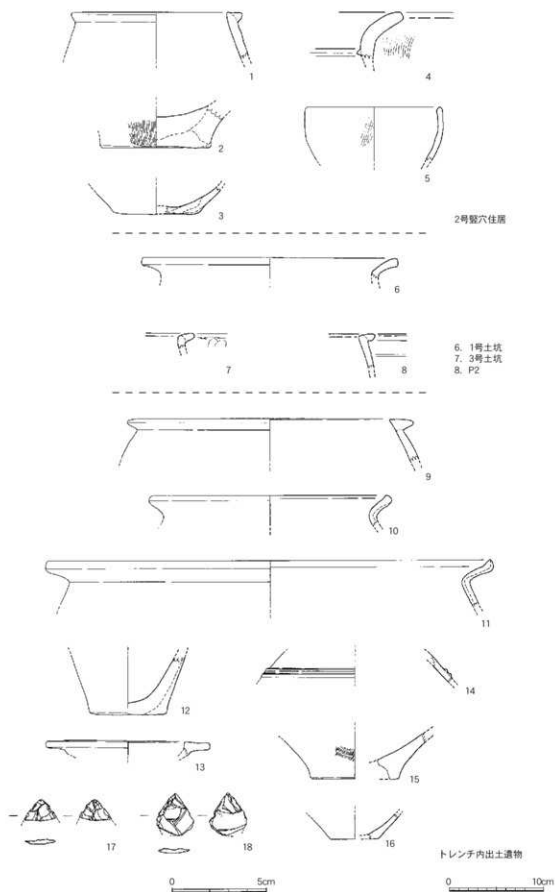
ピットは計4個検出された。このうちP2から1点図示可能な遺物が出土している。

出土遺物 (第4図8、図版3)

8は甕口縁部である。口縁端部はやや鋤先状に屈曲させ、口縁部から胴部にかけてはやや外に膨らむ。胴部外面には1条の沈線が施されている。

トレンチ出土の遺物 (第4図9～18、図版3)

この他、調査区内からは遺構に伴わないもののいくつか図示可能な遺物が出土しているので説明を加えることにする。9は甕である。口縁部は「亀ノ甲」タイプの口縁を呈している。胴部は大きく外に張り出す。10も甕である。口縁部は「く」の字を呈し、端部は跳ね上げ状口縁を呈する。内外面ナデ調整を施す。11も甕である。口縁部は「く」の字を呈し、端部は跳ね上げ状口縁を呈する。内外面ナデ調整を施す。12は甕の底部である。底面はほぼ平坦で、底端部から胴部にかけてはあまり広がらない。胴部外面は刷毛の後ナデ調整。内面はナデ調整が施される。13は高杯である。口縁部は鋤先状を呈し、平坦に仕上げている。内外面ナデ調整を施す。14は壺の胴部である。胴部にはM字状突帯が貼付されている。内外面ナデ調整を施す。15は壺の底部である。底部のつくりは厚く、底端部から胴部にかけては大きく広がる。外面刷毛の後ナデ調整、内面ナデ調整が施される。16は壺の底部である。底部のつくりは薄く仕上げ、底端部から胴部にかけては大きく広がる。17は石鏝である。先端部のみ残存している。残存での最大長1.1cm、厚さ0.4cm、重量0.5gを測る。黒曜石製。18は2次加工剥片である。薄い剥片を素材としており2方向に加工が施されている。最大長1.2cm、厚さ0.3cm、重量1.3gを測る。安山岩製。



第4図 8次調査区出土遺物実測図(土器 1/4・石器 1/2)

第3節 小結

8次調査では、1トレンチ内より竪穴住居や土坑・ピットなどが検出された。今回の調査では遺構の掘下げは行わなかったものの、遺構検出段階でこれらの遺構に伴う可能性のある遺物も出土したので、大まかにこれらの遺構の時期についてまとめてみる。

2号竪穴住居からは、甕や壺、椀などの遺物が出土したが、これらのうち3の甕は底部が平坦で薄い特徴を持っており、中期後半から末段階の遺物と推測され、5の椀もこれと同時期と考えられる。それ以外の遺物はこれより古い時期の特徴を持つもので流れ込みと判断される。

また、各土坑やピットから出土した遺物をみると、如意形や亀ノ甲タイプの口縁部の特徴を持つもので、いずれも前期末から中期初頭頃の時期と推測される。トレンチ内から出土した大半の遺物も図で示すとおり、この時期の遺物が数多く出土しており、また6次調査区でも、この時期と考えられる貯蔵穴が確認されていることから、当該時期の遺構が今回の調査区一帯まで広がっていたことが推測される。

しかしながら、本調査は6次調査区西側における弥生時代の墳墓群の範囲確認を目的として行ったものであり、その結果としては、調査区までの墳墓群の広がりは今回の調査では確認されるにはいたらなかった。

第1表 8次調査出土土器観察表

検出番号	区名	遺構名	種類	器種	法 量				調 整		胎 土	構成	色 調		備 考
					口径	胴口径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第4区-1	1T	2号住居	弥生	甕	(15.0)	-	-	(5.1)	ナテ	ナテ	ABCDH	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第4区-2	1T	2号住居	弥生	甕	-	-	11.6	(4.4)	ハケ	ナテ	ABCEH	良	灰褐色	暗黄褐色	
第4区-3	1T	2号住居	弥生	甕	-	-	(9.3)	(2.9)	ハケ後 ナテ	ナテ	ABCDEH	良	明灰褐色	明灰褐色	
第4区-4	1T	2号住居	弥生	壺	-	-	-	(4.9)	ナテ	ナテ	ABCEH	良	暗茶色	黒褐色	
第4区-5	1T	2号住居	弥生	甕	(14.9)	-	-	(5.8)	ハケ後 ナテ	ナテ	ABCDEH	良	茶褐色	黒褐色	丹塗身
第4区-6	1T	1号土坑	弥生	甕	(27.0)	-	-	(2.2)	ナテ	ナテ	ABCDEH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第4区-7	1T	3号土坑	弥生	甕	-	-	-	(1.7)	ナテ	ナテ	ABCEH	良	黒褐色	黒褐色	
第4区-8	1T	P2	弥生	甕	-	-	-	(3.6)	ナテ	ナテ	ABCDEH	良	黒褐色	黒褐色	
第4区-9	1T	一基	弥生	甕	(30.2)	-	-	(4.2)	ハケ	ナテ	ABCDH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第4区-10	1T	一基	弥生	甕	(25.2)	-	-	(3.2)	ナテ	ナテ	ABCDEH	良	明白黄褐色	明白黄褐色	
第4区-11	1T	一基	弥生	甕	(46.5)	-	-	(5.1)	ナテ	不明	ABCEH	良	明黄褐色	明黄褐色	
第4区-12	1T	一基	弥生	甕	-	-	(7.0)	(6.3)	ハケ後 ナテ	ナテ	ABCEH	良	茶褐色	黒褐色	
第4区-13	1T	一基	弥生	高坏	(17.4)	-	-	(1.5)	ナテ	ナテ	ABDEH	良	暗茶褐色	明黄褐色	
第4区-14	1T	一基	弥生	壺	-	-	-	(3.0)	不明	不明	ABDH	良	明茶褐色	明白黄褐色	
第4区-15	1T	一基	弥生	壺	-	-	(9.4)	(5.0)	ハケ後 ナテ	不明	ABCH	良	暗茶褐色	明黄褐色	
第4区-16	1T	一基	弥生	壺	-	-	(5.0)	(2.6)	不明	不明	ABCDH	良	明黄褐色	明黄褐色	

法量の単位はcm。() 書きは、残存と仮定を表す。

胎土：A角閃石 B石英 C長石 D赤色粒子 E白色粒子 F黒色粒子 G雲母 H砂粒

第2表 8次調査出土土器観察表

検出番号	区名	遺構名	器種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
第4区-17	1T	一基	石鏃	黒曜石	(1.1)	(1.6)	(0.4)	(0.5)	
第4区-18	1T	一基	二次加工割片	安山岩	(1.2)	(2.0)	(0.3)	(1.3)	

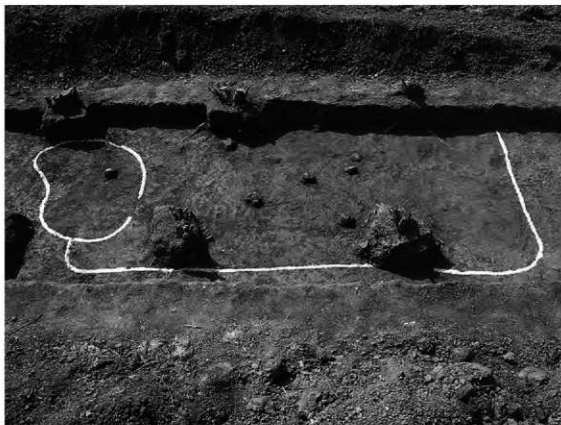
法量の単位はcm。() 書きは、残存と仮定を表す。



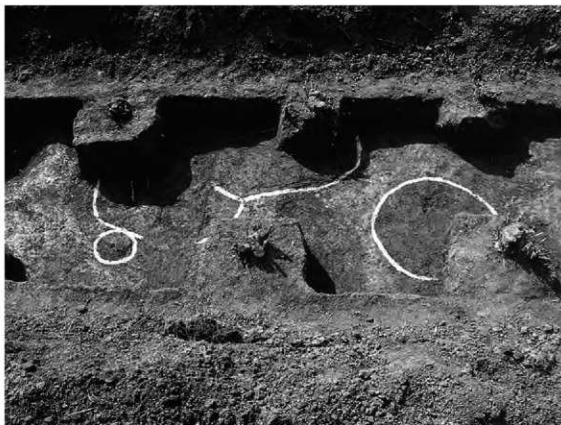
I トレンチ (北から)



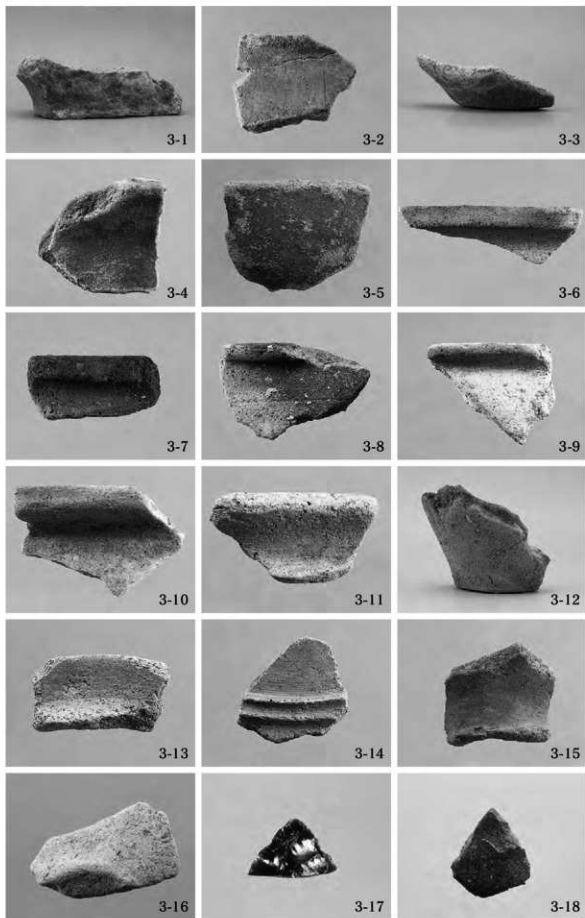
I トレンチ (南から)



1トレンチ1号竪穴住居 (東から)



1トレンチ1・2・4号土坑 (東から)



報告書抄録

ふりがな	ふきあげ
書名	吹上Ⅲ
副書名	7・8次調査の記録
巻次	
シリーズ名	日田地区遺跡群発掘調査報告／日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	6 / 57
編著者名	土居和幸・行時志郎
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601 日田市田島2-6-1
発行年月日	2005年1月24日

発掘調査 所収遺跡名	発掘調査 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
吹上遺跡	大分県日田市 大字渡里・吹上・ 友田	44204-6	651090	33°18'	130°59'50"	19970304 ～19970328 19980313 ～19980318	7次145㎡ 8次28.7㎡	確認 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吹上遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡9軒 + α、竪穴2基 + α、 土坑24基 + α、ピット29	弥生土器、石器	



吹上遺跡Ⅱ次調査中に発行した発掘調査速報新聞

吹上Ⅲ

—7・8次調査の記録—

日田地区遺跡群発掘調査報告6

日田市埋蔵文化財調査報告書第57集

平成17年1月24日

発行 日田市教育委員会

大分県日田市市島2-6-1

印刷 日田時報紙器印刷(株)

大分県日田市二串町345-3